

帝京大学を去るに当たって思うこと



滝 沢 由美子

帝京大学を去るに当たって、振り返ってみると、私は四〇年近く大学で教えてきた。

学生時代には将来先生になろうと考えていたが、それは大学の教員ではなく、人を教育する場合一番影響を与え、やり甲斐があるのは小学校の先生であると自らの経験から考えていたので、小学校の先生になりたいと思っていた。しかし、地理学専攻であったため、実習があるし卒業論文作成には現地調査等々にかかなりの時間と労力を割かねばならず、現実問題として小学校教員の免許取得は部活などと両立させるとなると困難であった。それで中

学校または高等学校の先生になろうと考えた。四年生になって具体的に、ある私立高等学校の教員にならないかという話があった。その時直ぐに「お願いします」という返事をすれば、その高校の先生になっていたし、私の人生も今とは大分違っていたのかも知れない。しかし、卒業論文の作成も半ばまで進み、「地理学」に真剣に向き合っていた時期であり、このままで良いのだろうかという疑問がわいてきたのであった。先生になるなら良い先生になりたい。良い先生というのは研究力のある先生であり、その点で今の自分は未だ不十分ではないか……。返事をしなければならぬ間の二日間、大袈裟に言えば人生の岐路に立って、かなり集中して考えた。結果、その話はお断りし大学院に進学した。その後は、大学の助手になり、大学で教鞭を執る傍ら百科事典の編集に携わったりし、文科省での勤務を経て一二年前に帝京大学に着任した。その間いくつかの大学の非常勤講師をしていた期間や子育ての期間などは、どのように過ごすかそれなりに迷いの多い時期もあった。それで、実感したのは、常に自然体でいることと、いつでも自分なりに誠実に考え一生懸命生活していれば、人生の岐路に立った時は勿論、転機が訪れた時にも良い方向に道が開けて行くものであるということであった。

教育に長年携わって来てもう一つ実感したのは、一般的に言われていることではあるが、先生の資質として先ず第一に大事なことは人間が好きであるということである。この点ずっとそのようであられたのは今思うと有り難いことであった。また、先生として大事な点は、（これは子育ての場合特に重要であり意識して実践してきたのであるが）、学生同士を比較して見ないことである。一人一人について、その学生が前と比較して成長しているかどうかを見るという見方をすることが重要である。概説など履修者が多数の授業では難しいことが多いが、地理学コースの専門科目や実習・演習、卒業論文指導では、選択する学生が比較的少数であったこともあり、一人

一人に対してそのような見方が出来、教育学科の学生も含めて三年間の内に大きく成長した学生に何人にも出会えたことは幸いであつた。

帝京大学の学生は大人しいと言われるが、総じて真面目で、一生懸命取り組もうという気持ちをもつた学生が多いと思う。これはとても重要なことであると思う。学生の皆さんには是非、より広く視野を広げた上で、自信をもつてその良さを活かし積極的に進んで行つて欲しいと願っている。

一二年間、同僚の先生は良い方々ばかりであつたし、だんだん学生の指導に手がかかるようになり何かと多忙であつたが、たいへん恵まれた日々であつたことに感謝している。

